



第3章 菅沢遺跡

菅沢遺跡は出雲市多伎町小田の小田川の左岸の急峻な地形の途中にある平坦部で、ほぼ標高25～100mの位置にある（第3図）。調査に当たっては23か所のトレンチ調査を実施し、遺跡の広がりが認められたA区（東側）とB区（西側）において発掘調査を行った。

1. 菅沢遺跡A区

A区はこれを便宜上A1区～A3区に分けて調査を行った（第5図）。このA区の西約400mにある南高北低の比較的緩い斜面をB区とし、これの西側をB1区、東側をB2区とした（第6図）。検出した遺構は、溝1（SD01）と土壙8（SK01～SK08）である。

基本的な層序は、北壁を例にとれば（第7図）、近現代の造成土である1～3層の下に、近世の堆積層3～9層があり、これに掘りこむかたちで近世の陶磁器を出土した溝（SD01）がある（第10図）。その下層の10層は明確ではないが中世の堆積層と考えられる。但し、10・3層と10・4層は古代、もしくはそれ以前の遺物が出土しており、古代には旧表土であった可能性がある。11層～14層はいわゆる地山層である。この地山層に検出されたSK01～SK08はいずれも古代以前のものと考えられる。

近世の堆積土層は平坦をなしており水田であったと考えられる。SD01はA1区のほぼ中央から始まっている幅約80cm、深さ約40cmの溝で、平面形は弓状となり北側の調査区外に延びている（第9図）。現代の水田区画とは無関係であり、いわゆる棚田状の水田に伴う溝と判断した。出土遺物は近世の肥前磁器が出土している（第17図）。

下層の遺構は灰色粘質土の地山に掘りこまれた遺構群である。SK02～SK08、SD02・03からなる（第11図）。但し検出面は異なっており、SK02～SK06までが第IV層中で検出、SK07・08、SD02・03が第IV層を除去後の地山面で検出した。このように掘りこみレベルが異なることから両者は時期がことなることが想定されるが、ここでは近世以前の遺構として一括して記述する。また、第IV層・第V層、及びこれらを取り除いた地山面は、III-1層以上の堆積のように平坦面をなくすことなく、浅い谷状地形を呈していた。このことから、地山は旧地形を維持していること、また、第IV層・第V層の段階には遺跡内を平坦化させる造成（＝水田化か）がおこなわれていなかつたと推測できる。

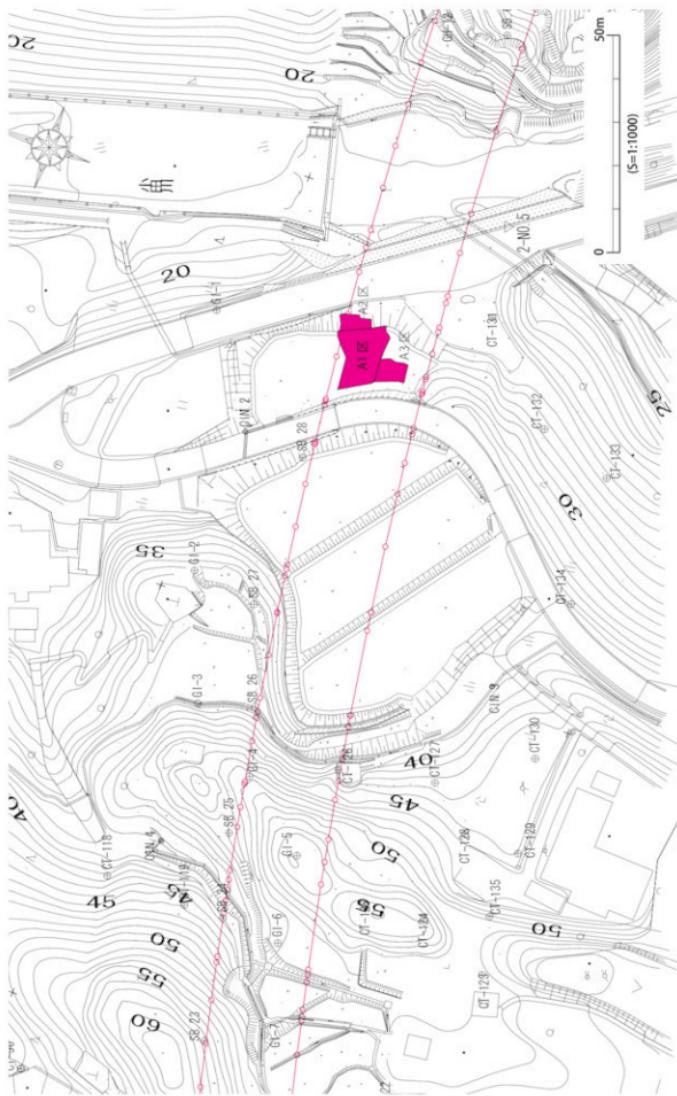
SK02～06は、SK02を除くといずれも不整形の土坑で、遺物もなく性格は不明である。SK02（第12図）は一辺約1m、深さ0.4mを測るほぼ正方形で掘形も箱堀となる土坑である。この周辺の地山は大変精緻な粘土であり、粘土探査坑の可能性がある。

SK07・08、SD02・03はいずれも地山直上で検出した土坑と溝である。土坑は不整形で性格不明。SD03（第14図）は溝との名称を与えたが、薬研掘状の断面、ないし、オーバーハングする断面形状を持つこと、いざれも急傾斜地に位置し、等高線に直行するように存在していることから、傾斜地に生じた水流痕跡かと思われる。どちらも第V層の黒褐色土がそのまま堆積しており、埋められた痕跡はない。古墳時代から奈良・平安時代にかけての土師器・須恵器が出土している。

SK01は調査区の北東隅、A2区に検出した溝状遺構である（第11図）。SK08に発し、真北に向かい、調査区の外に延びている（第12図）。幅と深さは一樣でない。幅は狭いところで10cm、広い部分で70cmある。深さは20cm～30cmで、南高北低である。

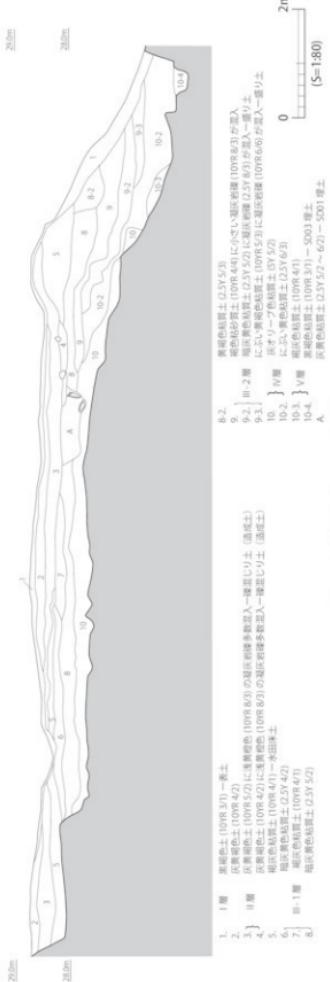


第5図 菅沢遺跡トレンチ配置図



第6図 菅沢遺跡A区調査区位置図

A-1 区北壁

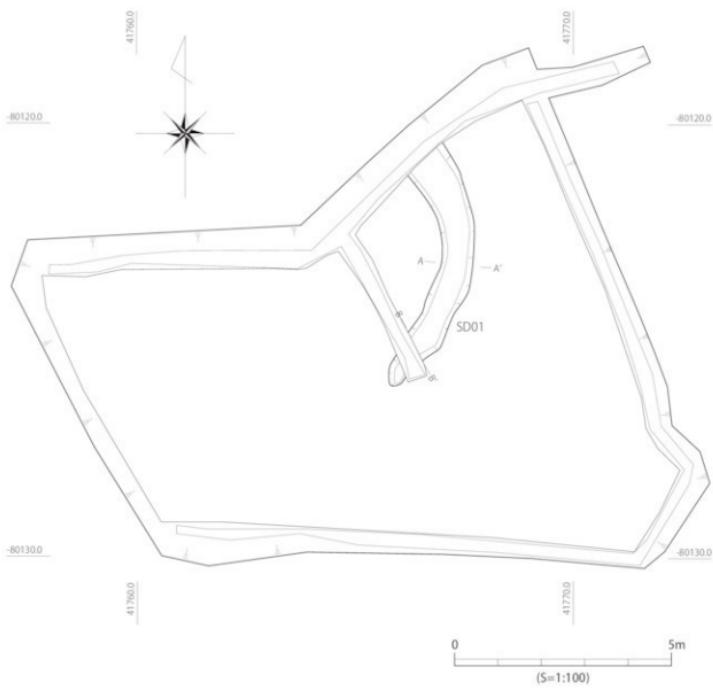


第7図 管沢造跡A1区北壁土壤図

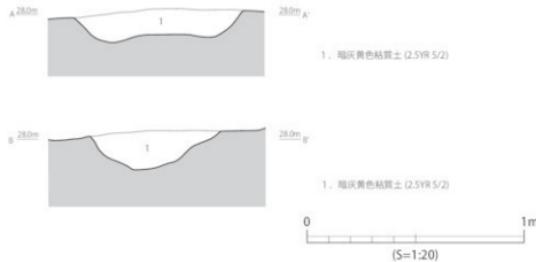
S001



第8図 管沢造跡A1区S001土壤図



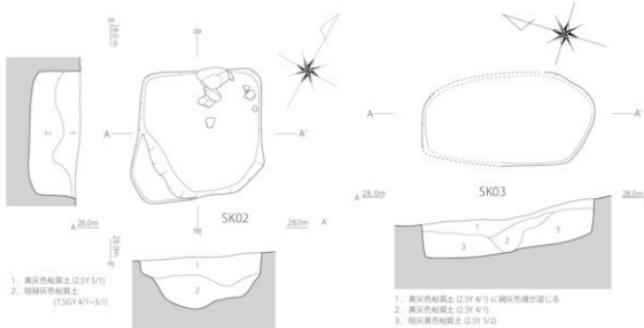
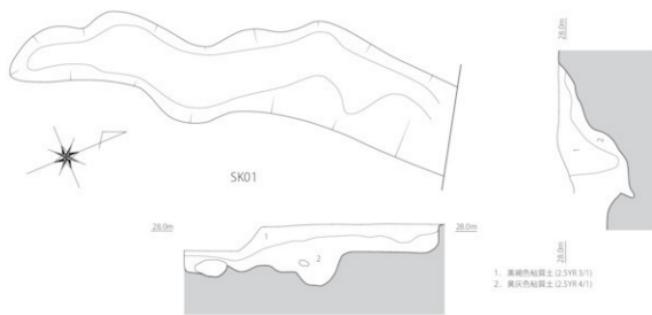
第9図 菅沢遺跡A1区上層遺構配置図



第10図 菅沢遺跡A1区上層SD01土層図

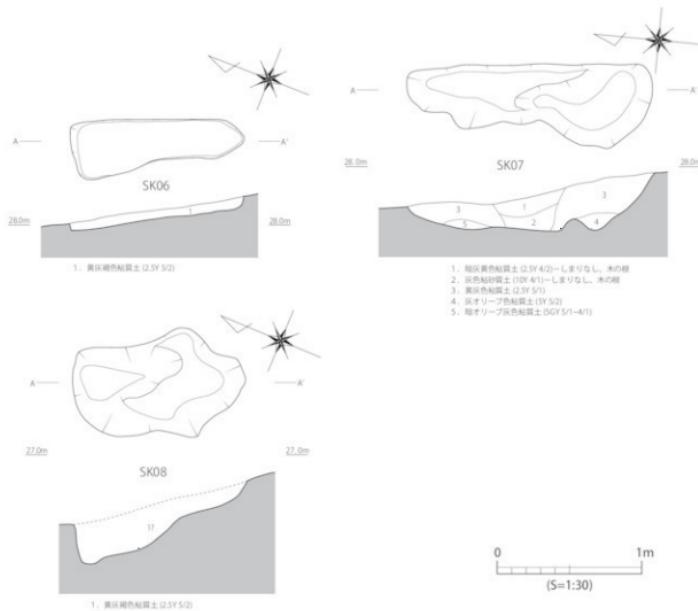
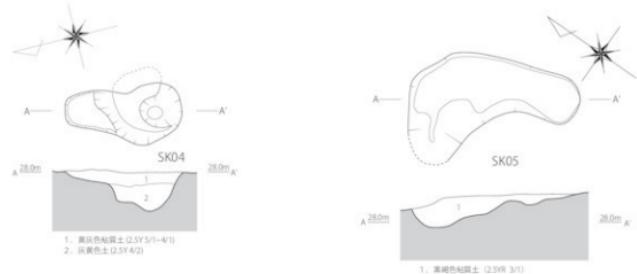


第 11 図 菅沢遺跡 A 区下層遺構配置図

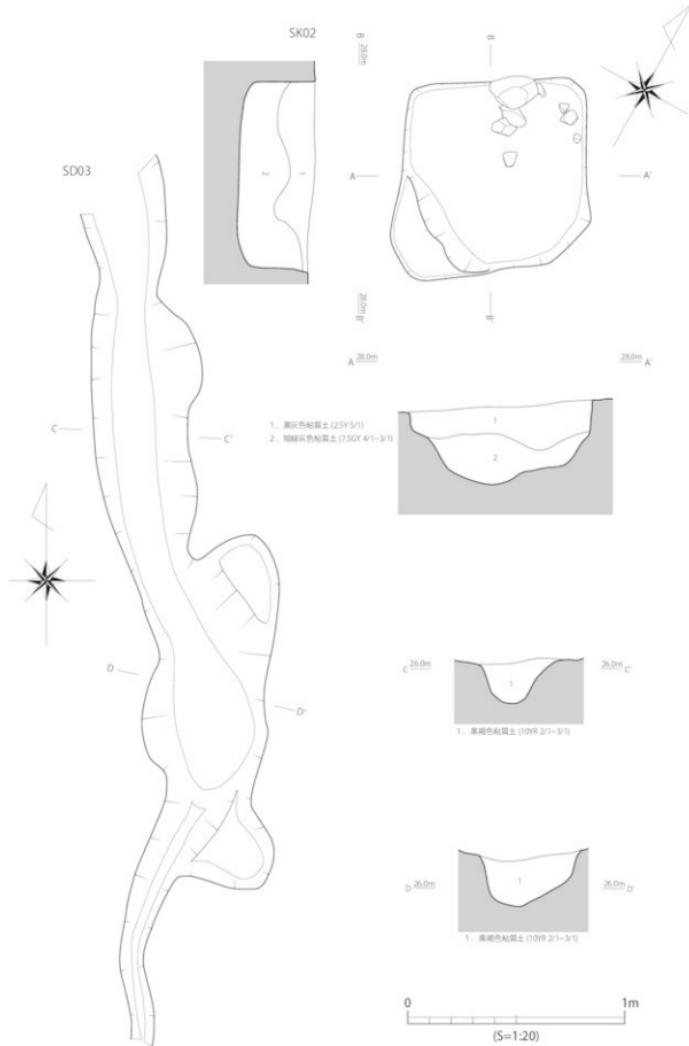


0 1m
(S=1:30)

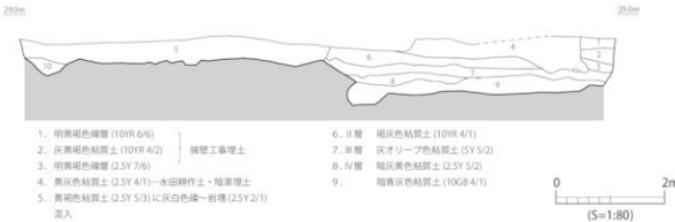
第 12 図 菅沢遺跡 A 区 SK01~SK03 実測図



第 13 図 菅沢遺跡 A 区 SK04 ~ SK08 実測図



第14図 菅沢遺跡 A区 SK02,SD03 実測図



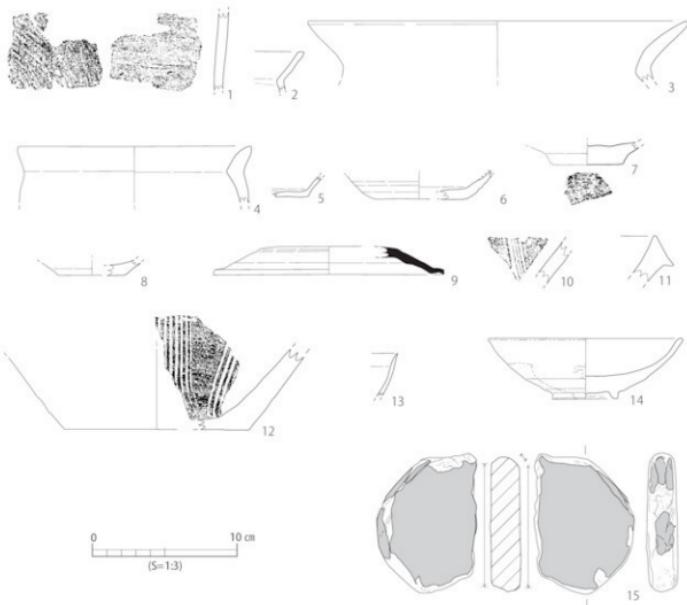
第15図 菅沢遺跡A1区南壁土層図



第16図 菅沢遺跡A3区東壁土層図

A調査区包含層出土遺物

第17図-1はA1区地盤粘土層直上の黒色土(Ⅴ層)から出土した縄文土器。器面調整は内外面ともに条痕地を残すナデ調整である。2はA1区Ⅲ・B層出土の古墳時代前期の土師器の甕。3、4は土師器の甕である。3はA1区IV層、V層、ならびにA2区V層からの出土である。4はA1区からの出土である。5から8は土師器の环である。5はA1区V層出土の奈良時代末から平安時代初頭とみられる。内外面ともに摩滅しており、調整は不明。外面に赤色顔料が塗布されている。6はA2区V層から出土。平安期とみられる。内外面ともに回転ナデ調整である。7はA1区V層出土。室町から戦国時代のものとみられる。内外面ともに摩滅しており、調整は不明。底部は回転糸切りとみられる。8はA1区Ⅲ・Ⅳ層からの出土。器面は摩滅しており、器面調整は不明。室町から戦国時代のものとみられる。二次焼成を受けている。9はA1区V層から出土。平安時代の須恵器の环蓋である。内外面ともにナデ調整。10はA3区Ⅳ層出土の土師質の擂鉢。内面に4条の擂目がみられる。11はA1区から出土。備前焼擂鉢の口縁部片。重根編年のⅣ-A-2に相当するとみられる。12は試掘トレンチ1の7層出土。備前焼擂鉢の底部片である。7条1単位以上の擂目がみられる。13はA1区IV層から出土。肥前系の丸形磁器碗である。外面に青磁釉がかかり、初期伊万里様式(17世紀前葉)のものとみられる。14はA1区から出土。肥前系の丸形陶器皿で、推定される年代は17世紀初頭とみられる。二次焼成を受けている。見込に胎土目跡がみられ、蘿灰釉が施釉され、底部は兜巾である。15はA2区のV層から出土した安山岩製の砥石。器長9.0cm、器幅7.0cm、器厚2.1cm、重量221.93gを測り、使用面は二面みられる。なお、トレンチ3か



第 17 図 菅沢遺跡 A 区出土遺物

らは染付片（第 18 図 1）、近世の灯明皿（同 2）、焰烙鍋の一部と思われるもの（同 3）など、近世の遺物が出土し、トレンチ 2 では長さ 22.6cm、重さ 142 g で、断面長方形の船釘に似た鉄釘が出土した（第 19 図）。SK01 では近世染付碗片（第 20 図）、SD01 では初期伊万里碗片（第 21 図）が出土した。

まとめ 以上をまとめると次のようないくつかの土地利用の変遷を考えられる。

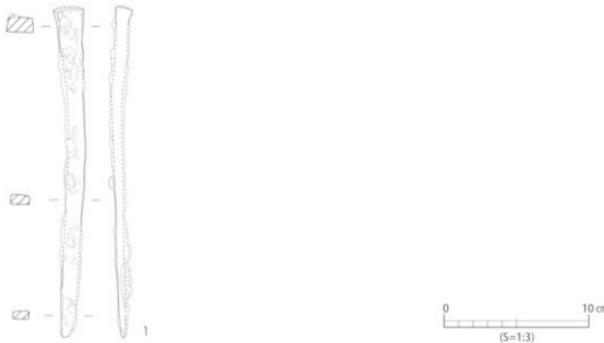
①古墳時代、奈良・平安時代の土器、中世の土師質土器や備前焼が出土した下層では、平坦な造成は行われておらず、浅い谷状地形のままであったので、この時期の集落などを想定すれば、その中心は調査区を少し外れたところにあると考えられる。

②上層からは近世の遺物が出土した。この時期には一旦谷状地形を造成し、盛土をして平坦面を形成していることが判明した。この平坦面にはやはり近世の蛇行する溝が認められた。そこには棚田が営まれたと考えられる。

③現代にいたっては圃場整備によって広く造成されたことが知られる。



第18図 菅沢遺跡トレンチ3出土遺物実測図



第19図 菅沢遺跡トレンチ2出土遺物実測図



第20図 菅沢A区SK01出土遺物実測図



第21図 菅沢遺跡A区SD01出土遺物実測図